平成30年度 弘前市総合計画審議会議事概要 (第6回)			
日 時	平成30年11月9日(金) 10時00分～11時20分		
場 所	弘前市役所3階 防災会議室	傍聴者	0人
出 席 者	委 員 (13人)	森会長、村松委員、生島委員、高島委員、阿部委員、藤田委員、清野(智)委員、熊谷委員、北村委員、山形委員、米塚委員、一戸委員、青山委員	
	事務局 (5人)	企画課長、企画課主幹、企画課総括主査、企画課主査、企画課主事	
	その他		
会 議 概 要			
1 開会			
2 議事			
(1) 次期弘前市総合計画素案について			
【将来都市像以外について】			
○主な意見等の内容は以下のとおり。			
<ul style="list-style-type: none"> ・ p16の地域経営アンケートについて、回答者の年齢層等はどうなっているか。前年度にも同じアンケートを実施したのか。グラフを見ると、子育てに対する支援が不十分だという意見が4番目に多いが、実際のサービスの利用者がどれぐらいいてこのような結果になったのか、アンケートの信ぴょう性に疑問がある。また、グラフの一部に文字切れがあるので修正が必要。 			
⇒アンケートは毎年度実施しており、16歳以上の市民で年齢層が偏ることのないように無作為抽出している。子育てに対する支援が不十分だという回答については、ここでは他の設問と比較するために、子育て世帯でない市民の回答も含めているが、子育ての施策の目標値では、アンケート回答者のうち子育て世帯の回答を抽出して指標にしており、実際に子育て中の方の声を参考に取組を展開している。			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域経営アンケートの表を見ると、ある項目を住みよいまちだと思う理由として選択している人もいれば、逆に住みにくいまちだと思う理由として選択している人もいて、どっちなのかが理解しづらい。一つの項目に対して、十分なのか、不十分なのか選択してもらう方がいいのではないか。 			
⇒住みよいまちだと思う理由の項目と住みにくいまちだと思う理由の項目がそれぞれ一致していればそのような比較ができると思うが、そのようにはなっていないため、2つの表を合体させることは難しい。見せ方はいろいろあると思うが、現時点ではこのように見せるのが最適だと考えている。			

・ p 6 では「近年は市街地拡大型の都市開発は終息を迎えつつあります。」とあるが、p 14 では、「業務用機械器具と電子部品・デバイス・電子回路が製造品出荷額の70%以上を占め、これは誘致企業が大きく牽引している」とあるため、終息を迎えつつあると断言するのではなく、継続していくような文言にし、さらに誘致企業についての記述も必要でないか。

⇒高度経済成長期と比較すると、という意味合いで記載しているが、ご意見をふまえて表現の見直しを検討していきたい。

・ p 26 の⑤について、「生産者が農業を継続したいと実感できるよう、6次産業化など経営・生産基盤等の支援を推進」とあるが、6次産業化よりもりんごの生産が基盤だと考えている農家もいるので、表現を修正すべきではないか。園地にはトイレや休憩所がないなど働く環境に課題があったりするので、経営・生産基盤等の支援として、内容に取り入れていただきたい。

⇒6次産業化については、これまでの審議会で議論があり、重要だと考えたため取り入れたものであるが、表現については検討していきたい。トイレなどの環境整備については、「経営・生産基盤等」の表現に含めており、具体的な内容については基本計画の施策の中に入れていたので、ここではより大きな枠で「経営・生産基盤等」としている。

【将来都市像について】

○主な意見等の内容は以下のとおり。

・ 5つの目指すまちの姿について、津軽弁を使いたいという意図は理解できるが、「離れらいね」という言葉は非常に語呂が悪いと思う。「ヤーヤドーが響くまち」は、ヤーヤドーは掛け声なので問題ない。「まめしい」は、発音の仕方が変わると思うが、個人的には「まめしい」ではなく「まみしい」だと思う。「わけもの」は単に若者といういい意味もあるが、共通語とは異なり若い人を揶揄するような意味でも使われるので、市民にとって違和感があるのではないか。「かへぐまち」については、市の最上位計画で稼ぐという言葉を使っていいのか疑問に思うので、「潤いのあるまち」などに変えた方が良いのではないか。津軽弁を使うのはいいとは思いますが、一つ一つの言葉の推敲が必要である。

⇒津軽弁の使い方がふさわしいかどうかをもう一度確認し、整理させていただきたい。

・ キャッチコピーに津軽弁を使うことについて、将来都市像策定までのプロセスや、津軽弁で弘前の情景を浮かばせながら政策に結び付けていくことは非常に大事だが、総合計画で多様性や共生の考えを取り入れているなかで、津軽弁がよそ者を排除するというニュアンスを持っているのも実態である。協働によるまちづくり推進審議会では、まちづくりに参加しきれない人を受け入れていくため、津軽弁

よりは共通語のニュートラルさを出すことも必要であることを答申に含める予定である。また、5つの目指すまちの姿は、体系図で表現されているところもあるので、なじみにくい言葉を使用する影響も含めて津軽弁を使う意義を検討することが必要である。

⇒市民会議では、市民自ら津軽弁を使わないといけない、津軽弁も一つの文化として後世に残すことが必要、という意見もあり、今回総合計画で採用したものであるが、協働によるまちづくり推進審議会のご意見も参考にしながら調整させていただきたい。

- ・津軽弁を使うことはある意味うれしいが、「わけもの」については、これまでの「子どもたちの笑顔」といったフレーズが「わけもの」になったと考えると、違和感がある。津軽弁を使うにしても「かへぐ」とかではなく、きれいな津軽弁、子どもたちに浸透してほしいような津軽弁を使っていたきたい。
- ・今回市民会議に参加したが、弘前市で生まれ育っても津軽弁が分からない人もいたので、津軽弁を使うことでそのような人が疎外感を受けるのではないかと。共通語を使って括弧書きにして津軽弁で標記してもいいのではないかと。これまでの「子どもたちの笑顔あふれるまち 弘前」は情景がイメージしやすいが、今回は、{りんご色のまち} がパッとイメージしにくいのではないかと。

⇒津軽弁を使うことについては、引き続き調整させていただく。イメージがわからないということについては、将来都市像に込められた思いをいろんな場面でしっかり説明して理解してもらうことが必要だと考えている。前回の将来都市像策定の時もさまざま意見があったが、しっかりと説明してきたところである。人口減少が進行するなか、地域や人のつながりがより重要だという意見が今回多くの市民からあり、このような将来都市像になっているので、しっかり受け入れられるよう丁寧に対応していきたい。

3 閉会